

特集 新型コロナを乗り切ろう

2019年12月中国武漢で始まったとされる新型コロナウイルスは、その後日本だけでなく世界に拡散し、各国で異常な事態となった。ジョンズ・ホプキンス大学のまとめたデータによれば、2020年12月31日現在世界の感染者は、8270万人、死者180万人を超えた。感染者数は、米国が最も多く、インド、ブラジル、ロシア、フランス、英国、トルコ、イタリアがこれに続いている。

一方、日本の感染者合は計23万人、死者3400人を超えた。更に東京の感染者数は、60177人、神奈川県は、21255人となって更に拡大の様子を示して、治まる様子を見せていない。

我々の日常生活は、2020年1年間に新型コロナに翻弄され、大きく崩れてしまった。英国では新型コロナが変身して、益々感染拡大の様相を示しているという情報もあり、新型コロナが我々の生活のどこまで大きな影響を与えるか想像もつかない。

本機関誌は、2020年6月発行の第11号において、医療機関の関係者からの新型コロナに関する実態報告や警告などの投稿をいただき、特集として報告しました。それ以来いろいろな方々から編集担当へ企業や家庭で発生したことを直接お話もいただきました。また、医療関係の広報誌なども届けられました。

編集担当に届けられた情報は、必ずしも愉快的情報ばかりではなく、更に厳しい内容もありました。

当イグレンとして、厳しい現実を目に向け、理解することから始めたい。そのために、第12号においては、我々周辺に発生している現象から、参考になることを取り上げて紹介し、報告とさせていただいた。

人間の目で直接見えず、まだ完全に正体を現していない新型コロナを前に「大変だ。大変だ」と大騒ぎをして新型コロナの影に怯えて消極的に沈み込んでも意味がない。逆に毎日のように不安になるような悪い情報ばかりを目や耳にして悲観して思考停止にならないように注意したい。

この特集のために宮川常務理事には、年末のご多忙な中、文化活動の実態についての考察を投稿していただきました。

編集担当には、直接お届けいただいたものだけでなく、電話によるユニークな情報のご提供もありました。お届けいただいた各種情報は、メディアでは見られない貴重な情報もありました。できるだけ忠実に報告の形にまとめたつもりです。

ご多忙の中、資料の送付や電話によるご提供などご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。
本当にありがとうございました。

- | | | |
|---|------------------------|------|
| 1 | コロナ禍における日本の文化活動状況を考察する | 宮川 豊 |
| 2 | 新型コロナの裏で起こっていること | 編集担当 |

1 コロナ禍における日本の文化活動状況を考察する

～演劇界の新しい道程を探して～

神奈川県異業種連携協議会
常務理事 宮川 豊

はじめに

今年（2020年）に入ってコロナの感染が騒がれ、2月の中旬頃からコンサートや演劇公演中止の情報が少しずつですが入ってきました。私が2月27日に、ある劇団公演の観劇に伺うと、急遽今日で中止となり楽日にしたという。東京都の要請だとはいえ「そこまではか」という感じを率直に私は持った。公演終了後のロビーは、何となくこの先の不安感や、途中の中止の悔しさも絡んで殺気立った感じがしていた。いつもの観劇後の高揚感は全くと言ってよいほどなく、劇団員からはこれから先これまでに経験したことのないコロナ禍に対する不安の声が聞かれた。それはそうだろう。ほとんどの劇団員にとって芝居ができないということは収入が途絶えるという意味もあるのでその不安はなおさらであろう。さらにほとんどの劇団員の多くは、舞台だけでは食べられず、アルバイトもして、それがなくなるかもしれないという不安もあっただろう。そしてそんな中で、少し自棄気味に演劇界そのものの存続を危ぶむ声も聞かれた。そこにさらに自分たちの生活基盤を支えている地方公演も軒並み中止や延期が決定されて

いたからである。絶望的になるのも無理はない。

1 コロナ禍の演劇界の状況

コロナ禍と言う厳しい状況の中で、4月、5月の自粛期間を経て、7月頃から感染予防対策をしながら、東京公演や地方公演の一部に再開の動きが出てきました。まさに手探りの無観客状態からの再開だったと伺いました。この期間は人と会うのもままならず、他人に話を聞くのも気を遣う状態でした。「自粛警察」という言葉が飛び交った頃でした。そして、やっと10月に入ってから当然感染対策が行われながらですが、東京も地方も半分ほど観客を入れてスタートしたとの情報も入ってきました。私の方も不安があったのですが、11月に入って別な劇団のアトリエで公演に様子伺いを兼ねて観劇させて頂きました。このアトリエでの公演は、自前の劇団の稽古場スペースを活用しての取り組みです。この形態での演劇を制作する側としての効用は、都内の劇場費が高額で経済負担が大きいという面と、その一方で、演劇空間を密にすることで演劇効果を上げようという両面があって、担当制作者に伺うと「今回は60%位の客席（満席で100名は入る）で実施されている」と聞きまし

た。公演の総収入は、ほとんどチケット代で賄われ、平均して4000円としてその金額は知れています。ステージ数は13回で、出演者が12人、その他にスタッフの人件費及び宣伝費などの制作費が掛かります。当然稽古場（アトリエ）の使用料は、自前とはいえ予算上は計上されるので、客席数に限りがある東京公演の分類に入るアトリエ公演は、採算度外視の部分がどうしてもあります。劇団としては、当然切符は売らなければいけません。売れなければ自らの首を絞めることになるからです。他の演劇関係者の言葉を借りると「今の時代（コロナ禍にあって余計）自粛状況と経済格差等によって、生活の余裕が失われ、切符を買って劇場に足を運ぶということがなかなか難しい状況になっています。その傾向は全国に広がり、地方ではさらに高齢化の問題も加わって、その厳しさが増している」とため息交じりで、簡単に切符を売るといっても、実際は大変だと言う。

2 赤字経営の演劇活動

今、商業演劇の一部を除いてほとんどの劇団（プロデュースの制作団体も含めて）は、そんな赤字を補填できる余裕などほとんど持っていません。また前出の制作担当者は、当日は平日だったが客席が一杯でお客様の評価も良いと云うのに浮かぬ顔をしていました。何故かと思ってもそれとなく伺うと、「このコロナ禍で、

感染予防の備品を購入する金額が馬鹿にならず、そんなお金にも苦慮している」と言う。次々と悩みは尽きないようです。

コロナの感染が騒がれてから10ヶ月程経過しても、予算措置がなされていないと言い、さらにこういう問題は今に始まったことではなく、いつの時代もこの国では起きていることで、私も演劇界に身を置いた時によく感じました。その理由のひとつは行政能力の問題であり、さらにもうひとつは書類手続きが煩雑だということです。うがった見方をすればこの国では、煩雑な役所手続で時間が多く取られてしまい、そのことで役所の有難みを知らせしめようとしているのかと思いたくなる場面が多くあり、前出の制作担当者は、怒りを通り越して諦め顔で「収入が途絶えている中で、すぐ使える資金が必要なんだ」と訴えていました。このコロナ過の中で、経済的に追い込まれている中で、余計そういう気持ちになっても可笑しくはありません。

政府の第二次補正予算で、芸術家や芸術団体を支援する「文化芸術活動の継続支援事業」が7月から取り組まれています。しかし、文化庁分としてこの事業に予算化された430億円のうち、実際に交付決定されているのは11月末現在で34%にすぎないとのこと。このことを指して前出の制作担当者は怒っていたのです。それでも「どんなに苦しくても芝居をやり続けることが大事。気持

ちが切れたら駄目」と今の心境として語っていた言葉が印象的でした。

しかし、そうは言ってもその現実の皺寄せが、ほとんどの俳優にきています。冒頭でも述べたように、アルバイトをしながらの生活が現実です。そのアルバイトもこのコロナ禍で厳しくなっています。ある俳優の言葉を借りると「このコロナ禍で踏んだり、蹴ったりの状態だ」と言う。そんな訳で「芝居どころじゃない」状態が起きているのです。「演劇界の危機」とまで言う人がいます。前段で言いましたが、私もその認識は持ちつつ、何か役に立つことはないかと、この拙い文章を綴っているのです。

それはさておき、結局最後は地方公演に頼らざるを得ない状況になっているのです。この構造は従来と同じですが、ここにきてさらにその地方公演に頼らざるを得なくなっているのです。その地方での公演の主催者は、演劇関係は演劇鑑賞会、市民劇場、親子劇場、学校公演などが主です。上演料は決まっていますので、ある程度見込みが立ちますが、その地方公演の状況もコロナ禍以前から大変な状況になっているのです。そこら辺のことは後でも触れたいと思います。

3 演劇だけでは食べていけない

ここに至る演劇界の道程は苦難の連続でした。そのためには俳優を中心とした戦前戦後の演劇状況も概括

的に触れなければなりません。もともと日本の文化・芸術に関する政府の支援は、予算面からみてもコロナの感染拡大前から先進国の中で下位に甘んじています。たとえば演劇に対しては、その少ない予算の中から公演に一部補助金をつけて、それに文化庁のクレジットをつけさせて、あたかも国が全面的に協力しているかのように見せかけている場面が、私が演劇に関わっていた時代にはよくありました。

その後、国の演劇への関わりとしての最大の事業が第二国立劇場問題です。第二国立劇場問題とは、その建設と運営を巡って、国（国の意向を受けた演劇関係者）と劇団を含めた創造現場とが紛糾する場面があったのです。私も当時、演劇雑誌を媒介にして「運営論」で論陣を張ったこともありました。その後は芸術監督制の導入や付属の俳優養成システムの導入などを試みましたが残念ながら日本の演劇状況を変えるような動きまでにはなりませんでした。第二国立劇場問題に対する評価は二分されましたが、ただ演劇界に大きな問題提起を投じたことは間違いありません。

つまり常に国の文化に対する現状を打開していくためには国の文化予算の増額の問題があり、またそれと合わせて箱もの行政（文化会館建設に邁進）と言われる問題も、常に文化行政の俎上に載せられていました。またその一方で、現場の問題として

は、舞台俳優の真のプロ化（自立する問題）の問題が、ずうっと横たわっていました。

戦後一貫して特に俳優は仕事としては、基本的に演劇だけで食べていく状況にはなく、それが当たり前の世界とされて、それが俳優の自立を阻害している部分でもあったようです。

このような状況の下で戦後暫らくして映画界が隆盛化すると劇団所属の俳優の一部は生活基盤を求めて、そちらに流れました。またお互いの利益が成立し、劇団と映画会社がユニットを組んで映画づくりをする動きもありました。その流れはテレビが普及していくと、さらに俳優のテレビ界への流出が加速して行きました。そんな中で映画やテレビの世界で、成功する者も生まれて、舞台から離れる者もいました。そして、舞台とテレビの二股をかける者も生まれました。一方で、苦しい中でも舞台に賭ける者も出てきました。この三者三様の動きを見ても日本では真の意味で舞台俳優はプロ化していなかったことがわかると思います。ただ映画やテレビで活躍することで演技幅が広がり、舞台でもそれが生かされて、名舞台を生み出す結果に繋がったこともあったと思われます。ここでも評価は二分し、どちらが良いとは断定はできません。ただ様々な効用があったことは間違いはありません。そのひとつとして、ネームバリューを生かして、観客動員に貢

献することもありました。しかし、その一方で、大半の舞台俳優はその劣悪な条件の中でも、数々の名舞台を生み出してきました。そのことも特記されなければなりません。そして、そのような舞台に賭ける姿に観客は惹きつけられていたのかもしれませんが、また、これからもそんな観客があり続けるでしょう。こうやって戦前戦後の舞台にも歴史があって今があります。

4 若い演劇家のモデルケース

このような歴史のある日本文化をそう簡単に失ってはいけないということをぜひ知っていただきたいのです。ただ制度的に経済的自立化を果たせてないひずみと弱い側面があるということです。そして、日本には制度的に舞台俳優を育て上げるシステムが脆弱でもあります。この脆弱さは、第二国立劇場にはシステムとして残っていると思われます。また野田秀樹氏が最近、演劇学校を創設したという情報も入って来ています。まだ機運は残念ながらあまり盛り上がり上げて来ていません。基本的には国立の総合演劇大学の創設が望まれます。こんな状況だからこそ、そういう機運を盛り上げる必要があります。

俳優の現実に焦点を当ててみたい。少し前のモデルケースですが、状況は今とそんなに変わっていません。そのモデルをAとします。ある劇団に所属する俳優です。そのAは

年齢を 30 歳として、何とか芝居だけで食べて行きたいと思っています。その為には年間 200 のステージをこなす必要がありますがその実現は難しいようです。年収 200 万円を想定しての話です。ところが 200 ステージというと簡単に思えるようですが、芝居には稽古時間があり、地方公演では移動日が加わってきます。稽古時間では長い時は 1 か月になることもあります。200 のステージでは、どうしても地方公演が主になるので移動日数も当然多くなってきます。彼の場合には、本当に休めるのは年末から正月にかけて位になってしまいます。ところがこんな条件に対応できる舞台俳優はほとんどいません。30 年ほど前なら考えられない数字ではありませんでしたが、現在の東京公演も地方公演も大幅減の中では到底無理な話です。そんな演劇界にコロナウイルスが襲い掛かってきたからたまりません。どこからか「昔はよかった」などとの声が聞こえてきそうですが、現実はそのような夢の話の砕いてしまっているのです。

5 鑑賞会会員の減少

演劇鑑賞会員の減少も問題です。地域によって演劇鑑賞会または市民劇場と呼ばれますが、演劇鑑賞会の組織を「鑑賞会」に統一して説明します。鑑賞会は全国各地の主だった都市を中心に組織され、全国組織です。中には 3 万人前後の小さな町にも 1000 人程の会員がいた時期もあり

ました。年数回、劇団やプロデュース制作団体が、その地域の文化会館(ホール)等で例会を行っています。鑑賞会は会員が会費を持ち寄り、自主的に運営に参加します。例会づくりにも参加するなど豊かな文化活動が展開されています。特に平日の例会には男性は仕事があって参加が難しく、女性が結果的には中心になりました。このように日本の性中心社会にあって特異な存在でもありました。また地域の文化団体としても認められ、地域の文化サロンの雰囲気もあり、会員が 1990 年代に入って急速に増えて、新しい地域にも鑑賞会が次々に生まれました。しかし、そのピークは 1990 年代の中頃で、会員が 28 万 8 千人を数えることもありました。そしてその頃は年間に 6 回の例会は少なくとも行っていたので 1 ステージの参加者が平均 800 人として計算をしますと、全国では約 360 ステージが行われていたことになります。それがなんと現在は、半分以上の 12 万人になっています。当然この数字は劇団・プロデュース制作団体の経営にも直撃しています。ただこの傾向はその後変わらず、会員数は下り坂をたどっています。

勿論、対策は全国的にもそれぞれの地域でも検討されてきています。演劇は、舞台と客席が火花散るような関係を創りださないと観客(会員)に忘れ去られてしまうのです。これが鑑賞会の基本です。これがないために作品によっては会員が大幅

に減るという苦い経験がありました。そのことを関係者は肝に命じるべきです。これは、私が現役時代、口を酸っぱくして言ってきたことです。全国で会員が増えている時でも同じでした。会員が増えていた時の事例から徹底して学ぶことです。実際その中からヒントが生まれてくるかもしれません。

会員減少の客観的要因として、高齢化問題（交通手段等）、格差による生活不安の問題、地方に行けばさらに人口減少の問題などがあります。そんな中でも、この文化の火を灯し続けることが重要です。またその一方で、国や地方行政の支援の問題も大事です。会場費の助成などを求め、地域の事情に合わせて取り組みましょう。また地域の文化をどう守っていくかの視点も大事です。そのためには、学校公演、親子劇場などの連携も必要です。どこも同じ状況で、特に学校公演は、コロナ禍による休校問題が直撃してキャンセルが相次いでいると伺っています。劇団によっては解散を考えざるをえないところまで追いつめられていると聞きます。「このコロナ禍だからこそ演劇を」を合言葉に関係方面に粘り強く働きかけて、演劇の輪を広げていくことが必要なのです。

6 演劇以外の分野の状況

新聞紙上やメディアから流れてくるコロナ禍の情報からも、他の芸術の分野の状況も左程変わっていない

ように思われます。ここでひとつ音楽の分野の事例を挙げておきます。あるオーケストラは半年間で70公演が中止になり、今年度4億円の赤字が見込まれ「存続の危機」を訴えています。どの分野も大変であることは同じようです。さらに文化的行事全般についての状況について、少し触れて置きます。2月のイベント「自粛」要請以後、コンサートや演劇、ミュージカルをはじめ多くのイベントが延期・中止を余儀なくされました。ぴあ総研の調査（5月）によると、ライブ・エンターテイメント業界は、2020年2月から2021年1月までの1年間で約6900億円の損失になると推計されています。こうした損失を出しながら、延べ2億2900万人の足を止め、新型コロナ感染拡大防止に貢献しました。

ドイツでは文化相が「文化は生命維持には必要」とのべ、無制限の支援を表明して注目を集めています。ところが日本では、新型コロナ対策での文化・芸術分野への支援は、第2次補正予算500億円（前段でも触れましたが文化庁分は430億円）余がついたものの推計損出額の1割にも達していません。そんな現状が現在も続いています。さらにここに来てコロナ感染が拡大し医療体制の崩壊が寸前のところまで迫っています。それでも有効な手立てが打てず、ここに来て、ワクチン待ちなどと言っている人々も現れてきています。私たちはコロナ後を見据えながら、新

たな道程を踏み出さなければなりません。なぜなら文化は人間が生きていく上での栄養源なのですから。そんなことを意識しながら、論考をさらに進めたいと思います。

7 芸術文化の花が開くことを願う

さて、この新型コロナウイルスは感染力が強く、世代に関係なく、蜜を避けなければ完全に感染するということがはっきりしてきました。当面は蜜を避けて演劇活動をしていくしかありませんがその不安は募るばかりです。ライブハウス・ミュージッククラブ関係8団体の事業者へのアンケート調査(7~8月実施)によると、今の状態が続いた場合、今後の運営の見通しについて「1年もつかわからない」という回答が合計9割以上に達しているとのことでした。また政府の発表として出された演劇や音楽などの公演・興行は、今年の市場規模が1306億円と前年比8割減(びあ総研)になるという試算が紹介されました。こう見てくるとコロナ禍の演劇公演の減少状況はすさまじいほどで目もくらむようです。

しかし、一転世界に目を向けてみますと、ニュージーランド、台湾、中国などでは、ロックダウンとPCR検査が徹底され、新型コロナウイルスが封じ込められているとのこと。その結果、経済活動は活発に行われていると世界のメディアは伝えています。当然文化活動も行われていると思われまます(日本のメディアはそういうこと

をあまり伝えていません)。このような状態をつくり出すには国の先頭に立つ者のリーダーシップによって実現することを世界の経験は伝えています。あるテレビ局でこのことを盛んに主張されるコメンテーターの方がいますが全くその通りです。しかし、日本政府の重い腰はなかなか上がりません。演劇界の現状をみれば、日本政府の強い支援が強く望まれます。

またその一方では、コロナ後のことも考えて行かなければいけません。コロナ禍と同様に感染対策と蜜を避ける努力は引き続き行っていくべきです。また蜜を避ける為の工夫としては、出演者やスタッフを絞った企画を検討されてもいいのではないのでしょうか。今年、劇場での再開が認められる中で一人の女優が蜜を避ける意味もあった企画として一人芝居で長台詞を熱演して、上演時話題になりました。私は行き損ねましたが、この公演は年末恒例の紀伊国屋演劇賞で個人賞を受賞しました。(余談ですが私も制作者としてこの演劇賞で団体賞を受賞させて頂きました)

また前に劇団のアトリエでの観劇の経験を述べさせて頂きましたが、装置も簡素でそのシンプルさが良く、場内もいつよりもゆったりしていて、感染対策もちゃんと取られていて良かったようです。

いくつかの事例を紹介させて頂きましたが、これらの取り組みも、ひとつの工夫かもしれません。コロナ

後は自分が好むと好まないに関わらず、私たちには様々な価値観の変更を突き付けられてくると思います。そしてこの演劇活動を支援する立場からして文化や芸術が「人間が生きて行く上でどれだけ必要なことなのか」をコロナ禍を経験してさらに強く実感しました。この実感を具体的な課題に繋げていくためには、広い視野を持ち、社会のあり方やさらに言えば、政治の在り方や、社会補償・医療の在り方、また非正規の働き手が主流という労働環境にあって、人間が人間らしく生きられず文化を享受できないと思います。幸い、このコロナ禍の中で一部の国民はそのことに気づき始めているのです。これらのことが少しずつでも前進して、文化の花が開くことを願いたいものです。

おわりに

こうして演劇や芸術に関する状況を分析して良くわかったのは、国の文化政策がいかに貧弱だということです。(今に始まったことではありませんが) それはこちら側にも問題があって、例えば私なんかも当時「国が予算を出さないなら、それならそれでいい」と開き直っていたところがありました。そんな考えは他の演劇関係者にもあったような気がします。このコロナ禍にあって、たとえば演劇関係者から伺った話ですが、知り合いの舞台俳優が持続化給付金の申請で役所に伺うと、当てはまる

職業欄がなくて、何とか周りの方に相談して、その他の欄で申し込んだとの話を聞きました。笑うに笑えない話ですがこれが現実です。ただ、この行動の一步が大事なのです。この行動がコロナ後をつくり出します。また先日新聞報道で「俳優ら労災保険加入4月から」の見出しで「厚生労働省の労働政策審議会部会は12月24日、フリーランス（個人事業主）として働く俳優ら芸能従事者やアニメーターなどのアニメーション制作従事者、柔道整復師を新たに労災保険の「特別加入制度」の対象とする省令案の要綱を了承した。来年4月から運用が始まる」との記事を目にしました。これも大きな前進です。この様な積み重ねが今こそ大事です。そして今、国には、さらに損失補てん・補償の立場を取らせて行くべきです。そして文化の灯を消さないためにも、超党派の「文化芸術振興議連」を提案し、国会でも議論されている「文化芸術復興基金」を創設することが必要です。遠慮なく言わせてもらえば、数千億円規模の国費を投入して、基金を創設して欲しいのです。これは大きな夢でしょうか。

宮川 豊 (みやがわ ゆたか)

1948年生 日本大学法学部卒業、劇団文化座制作部長、神奈川県中小企業家同友会事務局長、ようこそ秋田移住促進会議副会長を歴任。2014年神奈川県異業種連携協議会常任理事 現在、演劇論、地域活性化論を研究中

2 新型コロナの裏で起こっていること

機関誌編集担当

新型コロナの感染者の増大で2020年4月には、緊急事態宣言が発出され、自粛とはいいいながら企業の事業活動の制限は要請レベルです。多くの中小事業者もリモートワークの可能な事務職を中心に恐る恐る活動せざるを得ない状況となっています。毎朝の通勤は少々楽になったと言われたが、都内の地下鉄などは通勤客の大幅減少で営業上の利益の確保も難しくなっていわれている。

当機関誌第11号において「コロナ危機を乗り越えよう」という特集を組んで医療関係者の警告や注意喚起をしてから、関係各方面からいろいろな情報が寄せられました。第12号では、機関誌編集担当に寄せられた情報の中から各種メディアに掲載されない小さな話題を取り上げて報告にしたい。

編集担当としては、新型コロナにめげずに販売を拡大し、利益を上げている企業もあると聞いており、これを報告することで元気を取り戻したいとも考えた。しかし、これらの販売増大や高収益の企業では、実態を公に発表、説明することに躊躇された。社会全体だけでなく多くの企業が苦労する中で自社の良い実績を表明することを「良し」としない、日本人としての奥ゆかしさが感じられました。

今回は、これらに配慮して元気になる企業名や個人のお名前を公表することを差し控え、事象のみを報告することにとどめた。

1 あぶり出された厳しい現実

(1) ネットカフェ難民の発生

ネットカフェは、もともと残業や遊びで終電に遅れた人たちが翌朝まで時間をつぶし、シャワーを浴び、翌日までリフレッシュして会社へ出勤するために低料金利用できるスペースとして開業されたものらしい。ホテル代やタクシー代を支払って帰宅し、翌朝早く出勤することを考えると手軽に使用できる設備として活用されてきた。従来、ネットカフェを利用する人たちは、固定した生活拠点をもち、緊急事態例えば、徹夜作業などで帰宅できない場合に利用するのが普通と考えられていた。

ネットカフェでは、契約する金額で個室または共同使用可能スペースを貸与される。パソコン、飲み物、横になるスペース、シャワー、時間をつぶすための漫画本、雑誌、新聞などが備えてある。アルコールも含めて飲み物は、購入して持ち込みも可能である。利用者によれば、ネットカフェ利用料は月4万円くらいになるという。平均すれば1日¥1300

あまりの計算である。貸与されるパソコンは、比較的新しいソフトを準備されており、個人のメールアドレスを使用して、諸活動も可能である。メールアドレスに届いたメールを都度携帯電話へ転送が可能で携帯電話を契約して所有すれば、個人への連絡はほとんど支障がなく生活ができる。IT時代に適応して進化しているようだ。しかし、新型コロナにより、かつて想像できないような現実をあぶり出した。

我々の理解では、先に述べたように、終電に遅れた人たちのための施設とは言えないことが露呈した。つまりネットカフェ利用者の中に固定した生活拠点例えばアパートなど住所を持たず、ネットカフェ自体が生活拠点（住居）となっていたことが判明したのだ。新型コロナの感染拡散により、ネットカフェが閉鎖に追い込まれてネットカフェを住居としていた人たちが「ネットカフェ難民」としてあぶり出されたのだ。その人口が都内には3000人から5000人ともいわれた。

彼らは、新型コロナにより、ネットカフェの閉鎖と共に仕事を失うと同時に住むところもなくなってしまったのである。定まった住所を持っていないので新しく就職活動ができないところに追い込まれた。この実態を知った東京都では彼らのためにホテルを借り切りにしてそこを提供していることも報道された。

神奈川県でも例外ではなかった。ネットカフェの閉鎖により、住むと

ころを失った人たちが発生したのである。神奈川県では、新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策として、緊急事態宣言に基づき休業要請を行った。この要請はネットカフェもその対象となった。神奈川県ではネットカフェが閉鎖になり、その利用者の住居が無くなってしまった人たちのために神奈川県武道館を寝泊まりする人のために提供することにした。開放した県立武道館の館内にある剣道場、柔道場など四つの大部屋に、高さ約2メートルの布で間仕切りした個室を3から4メートルほどの間隔で並べた。個室は2メートル四方で、中には簡易ベッドがあり、一人あたり毛布三枚が配られたが食事の提供はない。館内ではシャワーを利用でき、検温や消毒、換気といった感染防止にも配慮された。この間、個人や企業、団体などから消毒液、食べ物、飲み物、カイロやマスクなどの寄付が寄せられ、近くの販売店の好意で新聞も読むことができた。実際の利用は、4月12日に15名の利用で開始され、4月27日に最大76名を数えたが、次第に減少し、5月6日をもって閉所された。

(2) 夢を中断された人たち

アルバイト学生、フリーター、不定期従業員、非正規従業員など販売高の減少で直ちに首を切られる運命にある従業員すべてがその対象である。4月に発出された緊急事態宣言で学生は、リモート授業で直接授業を受ける機会が激減した。それだけ

でなく学費や生活費を賄うはずのアルバイト先も激減した。

地方から出てきた学生はよほど裕福な家でない限り、学費及び学生の生活費を仕送りで賄うことができないために勉強の合間にアルバイトで学生生活を過ごしてきた。学びつつ、学費や生活費をアルバイトで稼ぎながら、学生生活を送ることは覚悟で出てきたはずだが新型コロナでその多くを失ったのである。

非正規従業員やフリーターも、学費は不要であるがこれに準ずる条件で生活は厳しさを増した。正規の職業を探しつつ、仕事を探しながら生活する。各自の能力に夢や希望を託して、毎日を過ごしていたはずであるが厳しさが格段に大きくなった。

新型コロナの拡散で劇団の劇団員、各地の交響楽団の楽器の演奏者、ライブハウスで活動する人たちは、そのイベントや活動の機会がほとんどなくなってしまった。ホールでの演奏は制限され、その上、入場者が2分の1や3分の1に入場者が制限され、最低限の費用さえも確保することが難しくなった。

演劇やコンサートには、主催者から都度声がかかり、舞台装置の製作や音楽や照明を担当する装置を使用し、特殊な技術や能力を発揮して裏方として働く人々が大勢いる。これらの裏方と言われる彼らがいなければ、演劇、コンサートを始めライブハウスなどのイベントは成り立たない重要な存在である。

新型コロナは、劇団や演奏のプロだけではなく、イベントを陰で支えて能力を発揮する人たちもその出番を奪ってしまったのである。その多くは「個人事業主」の立場である。

イベントの中止により、毎日将来に夢や希望を託して活動してきたがこれらの人たちの多くは、これが今中断された状態にある。

2 生保業界と外交員の厳しい実態

生命保険業界は新型コロナでは、厳しい状況にある。生命保険契約は、若い世代はその必要性を感じていない。保険外交員は交渉相手に直接面談し、病気やけがなどでその必要性を感じてもらい初めて契約が成立する運びとなる。新型コロナの感染がこれだけ広い範囲に感染拡大して、死者の数が増えてくると生命保険や医療保険の必要性に結びつくはずなのだが実態は難しい。

以下、生命保険業界の動きと生命保険外交員の苦労話である。

(1) コロナ保険の存在

これだけ新型コロナの感染者が増えてくるとこれを対象とする商品で保険業界が動くはずである。このような目で見えていたら新聞の広告に「コロナ保険」が掲載されているのを発見した。生命保険の関係者に聞いてみると「コロナ保険」そのものは存在しないという。実際の名称は、「感染症入院一時金保険」とか「災害入院一時金保険」で販売されている保険をこのように言って販売

しているという。同様な保険も含めて、2件の保険を紹介する。

① T生命保険

「コロナ保険新発売 新型コロナの入院で最高40万円 感染症プラス入院一時金保険 災害入院一時金保険」これがT生命の新聞広告の見出しである。これはすでに販売されている保険であり、新型コロナウイルス感染症を指定感染症として政令（令和2年政令第11号）に定めるとの記載もある。入院一時金保険と感染症プラス入院一時金金額20万円が付加し、合計40万円になるらしい。

所定の感染症を原因とした入院の場合、感染症プラス入院一時金保険は、新型コロナウイルス感染症等、所定の感染症を保障する。しかし、責任開始日から10日以内に感染した所定の感染症には支払い対象外になる。実際の支払いとなると確認事項がある。

② F生命保険

入院一時金給付付保険（医療保険）が正式名称であり、2020年3月2日以降用のパンフレットがあった。この日程で改訂版パンフレットが出されたことから想定すると新型コロナを対象としていることは明白である。しかし、この種の保険は、病気やけがで入院した際にまとまった金額が受け取れる一時金給付として20万円が受け取ることができる保険として以前から存在していた「医療保険」であった。

(2) 契約が取れない生保営業

新型コロナ保険が発売されても、外交員の営業活動も実際は難しい。

生命保険の新規契約は、直接面談によるところが大きい。ところが新型コロナの感染者が増加で昼休みだけでなく就業後の営業しようとしても会社内に入れなくなって直接面談する機会が非常に減少した。交渉の相手である社員がコロナの感染を恐れて、会社内で面談することを了解してくれない。

生命保険は当面の生活に不便をきたすものではない。生命保険などは、交渉相手に病気やけがなどでその必要性を直接面談で説明して初めてその必要性を感じてもらえる。全く初めての交渉相手にリモート面談では当方の人間性を理解してもらうことができない。生命保険は新規契約には、相手との信頼関係がなければ成立しない。生命保険の必要性を感じていない若い世代は生命保険の外交員はうるさい存在となる。新型コロナが面談を体裁よく断ることができる理由の一つになる。外交員にはリモートワークが弊害の方に働いているらしい。

3 コロナに負けない元気な業界

社会情勢の厳しい中でもめげずに頑張っていると言うより返って利益を上げている企業もある。デジタルトランスフォーメーション（DX）とか巣ごもりによる需要増を取り込んだところだ。しかし、これらの影

響されない企業では、経営状態の良いことを表に出そうとはしない。具体的企業名は控えて、業種と企業規模のみにとどめておく。

好成績を上げている業界の一つにソフトウェア開発をする業界がある。システム開発する比較的大きい企業からソフトウェアの開発を下請けしている。従業員数は5名から10名程度の人数で厳しい注文に対して柔軟に対応する能力が評価されている。コロナ禍で巣籠りになりやすい状況ではゲーム機に使用する新しいソフトウェアの開発が急がれる。

一時、好況時には、毎日徹夜作業に追われて自分で「我々はIT土方（ITどかた）だ」と自称していたソフトウェアエンジニアも新型コロナのおかげで現在元気に働いている。

システムや電気機械機器、測定機器などのサービスマンテナンスを担当する企業も極めて元気で新型コロナに負けてはいない。コロナ禍のように社会的状態が不安定な時こそシステムや各種設備は正常に稼働することを厳しく要求される。地震や台風など大きな災害に遭遇しても直ちに復帰が期待される。それには、システムや設備機器は正常に機能するように機器の適切な構成の確認やサービスマンテナンスは欠かすことができない。

生産設備や測定設備などは生身の人間が対応できなくても設備やシステムの正常な働きが期待される。新型コロナのように、たとえ社会の活

動が少々制限されても、むしろこの時にこそ、厳しく定期点検することが必要になる。

4 コロナの影での残念無念

(1) コロナと誤解された家族

近くに住む知人が2～3日前にこのすぐ近くの家で「日常見かけないような物々しい完全防護服で出入りする人」を見かけたと知らせてくれた。その家の住人ではなく、防護服を着用して普通の状態ではなかったらしい。時節柄「きっとコロナ感染者あったにちがいない」そのために「保健所から消毒のためにきたに違いない」との想像と思い込みも加わっていた。

その家は、我々の自宅から、100メートルも離れていない。我々は後から移り住んだのでその家の家族構成なども知ることはなかった。同じ町内と言っても古くからの住人であれば、少々の情報が入るが日常全く付き合いがなければ、家の様子を知る機会は少ない。知らせてくれた方も同じであった。

毎日その家の前を通るのでそのたびに気になっていた。観察する限り、家人の出入りする様子も見られない。そういえば夕方帰宅する際も家の中に明かりが見えない日が多いような気がする。そんなことから「コロナの感染者が出たようだ」という認識でほとんど忘れかけていた。

町内会では、「空き巣があった」などの事件があれば、掲示板に知らされる。不幸があると全員ではないが「訃報」としてお知らせもある。この時はこの訃報の掲示もなかった。コロナでは個人情報として都合が悪いから掲示も省略したと思い込む原因にもなった。病院でコロナが原因で亡くなれば、そのまま家族に知らされずにビニールなどで嚴重に覆われて火葬され、「お骨だけになって帰ってくる」とテレビなどでも報じられている。この話も我々の生活とは現実離れがあり、似ている。

正しい情報が入らないまま2か月ほど経過した。そのうちに間接的に誤解を解く情報が別のルートで入ってきた。その家には若い夫妻とお年寄り夫婦が住んでいたことがわかった。お年寄りの内のお一人が亡くなり、あまり日数を置かずにもう一人も亡くなるということがあったということが判明した。

真相はこうであった。最初に物々しい完全防護服でその家に入りしっていたのは、保健所などの消毒をする人たちではなく葬儀屋さんであったという。最近葬儀屋さんにお問い合わせがあっても「もしかしたらコロナかもしれない」という不安がある。従って葬儀さんは、万が一のことを考えて完全防護服の装備で対応することになっているらしい。最初に知らせてくれた人は物々しい完全防護服で出入りする葬儀さんを「保健

所からの消毒」と思い込んでしまったようである。

もし、新型コロナ発生以前であれば、完全武装服で出入りする人を見れば、「なにかあったのですか」と素直に聞いたであろう。また、その際ご家族の方にお会いできれば挨拶などで真相を知ることができたと思われる。葬儀屋さんとの面識もなかった。最初に見かけた物々しい完全防護服を葬儀屋さんとは想像もできなかった。このためにとんでもない誤解となってしまったのである。

その住人お二人は、コロナが原因で亡くなられたのではなかった。幸い、周辺でこのような誤解があったことも知られずに済んだ。コロナ禍の中で正しい情報の大切さを思い知らされた事件であった。

(2) 恩義に報えなかったご夫妻

つい最近、友人のご主人と奥さんの親戚筋にご不幸があった。ご夫妻両方ともに山形県が故郷であった。叔父さんと叔母さんが無くなられたとの連絡が入った。いずれも電話で連絡があったのだがお葬式は簡単に身内だけで済ませるので「わざわざ来なくてもいいですよ」との話であった。若い時に大変お世話になった叔父さんと叔母さんだけに必ず出席すると返事をした。すると連絡をしてきた相手は逆に「迷惑なので来ないでほしい」という強い口調になったという。

故郷では、自宅周辺に東京や神奈川県ナンバーの車を見かけるとそ

れだけで新型コロナを心配して、迷惑な目で見られるという。このように言われるとご夫妻もそれ以上強く出席すると言えなくなり出席をあきらめたという。大変お世話になった方であり、何かあれば駆けつけて恩義を表したいと思っていたのでご夫妻の何とも言えない寂しく残念な気持ちが残っている。

今年（2020年）の夏には、岩手県出身の学生さんが、夏休みに帰京しようと自宅に電話をしたら、「絶対に帰京するな」と両親から強く反対された話は新聞やテレビでも報道された。それまで岩手県ではコロナ感染者が0を続けており、もし親戚兄弟など誰かが感染して第1号になると大変な迷惑になるということであった。寂しい話は、ご不幸だけではなく、懐かしい故郷へ帰ることも許されなくなったのである。

5 元気に活動するご夫妻と女性

(1) GoTo トラベルで元気な夫妻

みんなコロナコロナと大騒ぎをしているけれども、「周辺でコロナに感染した人は誰もいないよ」と元気な人たちがいる。毎年、札幌雪祭りに行っては、メールで報告をくれる80歳になる友人ご夫妻がある。とにかく健康で元気でお金の心配もない。今年の雪まつりは中止らしいがどんな知らせがあるか楽しみである。

コロナの感染者が話題になってから、観光地はお客が少なく、空いていて自由に観光できると言う。2020

年4月に緊急事態宣言出されてからは、予約も自由自在で全く問題ない。逆にお客が少なくなっているのでホテル代なども前に比べて相当割安になっており、前よりも「ゆったり過ごせる」とご満悦である。だから毎月のように時間を調整して出かけている。

7月になってGoToキャンペーンが出されてからは、更に費用が安くなった。せっかく政府が準備してくれた「Gotoトラベル」を活用しない手はないと大変安く旅行ができると毎月楽しんでおられる。通常金額の2分の1以下で旅行できることに味を占めて、上手に旅行を計画し、「このような機会はめったにないのだから利用しなければ損よ」と北へ南へと旅行してはその都度電話やメールで報告が来る。諸事情でマネができない私にはうらやましい限りである。

(2) コロナに負けず進化をめざす

70歳を超えてから走ることの面白さに目覚めた女性がいる。既に東京マラソンの抽選に2回当選して、7時間の制限時間いっぱい走って完走した。過去2回のマラソン当日には、寒い早朝に都庁前に集合して朝の9時過ぎにスタートする。そして、2回とも制限時間ギリギリの時刻までに40km余りをゴールを目指して走った。東京在住の彼女の友人は、本人にわかるような大きな手製のプラカードを作って沿道で応援してくれる。東北から親戚も応援に駆け付ける。

走る途中で見知らぬ人と何度も何度もハイタッチし、走る人から元気をもらって完走できる快感がたまらないらしい。過去の2回は、運がよく抽選に当たり、参加できた。2020年の大会には残念ながら抽選に外れたがコロナ問題で中止になった。

2021年の東京マラソンは、今年の当選者の権利で新しい募集はない。

次の東京マラソンの参加の可能性は2022年になる。それでもハイタッチをしながら40kmを完走する快感を忘れられない。もう一度応募し、当選し完走するのが現在の彼女の夢である。「コロナなんかには負けてはいられない。さらに進化したい」と毎日の10kmの早朝練習を開始した。次の大会では彼女は80歳を超える計算だが次の大会の抽選を心待ちしている。次の応募に当選し、夢をかなえることを祈らずにはられない。

6 俳句と短歌に現れた世相の変化

俳句を楽しむ友人から最近新型コロナをよんだ俳句や短歌が増えている旨の連絡があった。日本経済新聞では毎週土曜日の文芸欄には新聞の読者から投稿され、選者による選ばれたいくつかの俳句や短歌が掲載される。私自身、俳句も短歌を作るたしなみや楽しむ能力もないが親戚筋に俳句の好きな人がいる。今回特集を組むにあたり、少しだけ遡って過去に掲載された俳句と短歌に目を通してみた。

確かに新型コロナに関する俳句や短歌をいくつか発見した。そこにはそれぞれ詠み人の淡々とした、時にはせつない、そしてさみしい気持ちが表現されている。俳句も短歌も自分でつくる楽しみを持たなくても3度、4度とゆっくり読むとわずかな文字に作者の気持ちが実によく表されているのに感心させられる。

例えば、次のようなものがあつた。

今年の前半には、秋祭りがあつても密を避けるために神輿は担ぐことがなくなり、トラックの荷台に乗せられて移動するという寂しさの俳句が心に残つた。年配のビジネスマンであろうか、毎月の予定表が全く「がら空き」という寂しさを表現した俳句もあつた。

秋になって久しぶりに行きつけた飲み屋を訪ねてみたら、閉店しましたという「張り紙に」ショックを受けた俳句の詠み人には全く同情させられた。客足が無くなって閉店せざるを得なくなった厳しい現実を知らされ、失業した男性が失業して風を上げている様子の短歌には何とも言えない寂しい風景が感じられた。

昔は「地震、雷、火事、親父」と言われたものだ。昔、男性は4番目ではあるが怖がられて存在価値があつた。ところが今は「地震、雷、火事、コロナ」と4番目がコロナに代わってしまった。コロナに奪われた今を悲しむ男性の心情を上手に吐露する姿であつた。

部屋にある地球儀を回してみると南半球は、今は夏、北半球は寒い冬である。しかし、南にも北にもコロナウイルスに感染した国名ばかりが見られると歌う人もいた。

猫をなでながらテレワークをするビジネスマンの姿や全員マスクをして合唱をする姿を想像させる風景など新型コロナが拡散する今にしか作れない短歌や俳句もあった。

風情や心情をわずか 17 文字や 31 文字の中に上手に表現されている。「ふるいけや かわずとびこむ 水の音」とよんだ松尾芭蕉がいたら、この新型コロナに関する事象をどのように表現するだろうか。

(先に紹介した俳句や短歌をそのまま掲載したいと思ったが著作権に配慮して掲載を省略しました)

7 認証取得に成功した会社

新型コロナ禍の中で自粛ムードを利用して社内にカツを入れて ISO 認証取得に成功した会社がある。安全に関する設備の販売や点検サービスをする企業である。

南海トラフ地震、首都直下型地震、毎年押し寄せる大型台風など常時災害に備える準備が必要な日本列島は、どの企業でも安全に関する設備の設置と点検作業に手を抜くことはない。

過去の受注実績により、お客様からの評判がよく、点検作業や新しい設備の設置に関する注文の減少など新型コロナの影響はほとんどない。

2020 年の初めから、新型コロナウイルスのために経営者だけでなく、企業で働く皆さんも相当行動が制限されている。この状態がいつまで継続するのかまだ先が読めない状態にある中でこの会社の社長さんは前から社内の意識改革と業務改善について何とかしたいと懸念されていた。そこでこれを良い機会と捉えて ISO9001 の導入を決断した。

ISO9001 の認証の手続きは、5S よりも更に書類の準備や従業員教育など時間と労力を要します。電子機器製造業における ISO 認証の取得は、各種文書の作成だけでも 10 センチメートルのファイルにして 20~30 冊大型の書類ロッカーを満たすほどの大量の書類が必要と聞かされていた。社長さんを中心として、品質管理責任者を選任し、基本的な考え方及び仕事の仕方に教育訓練が必要となります。しかし、社長さんの会社は、受注件名を中心にサービス事業ですから、それほど多くの書類は必要でないとアドバイスもいただき、昨年に準備を始めた。

ISO9001 の認証は、現在のところ受注に際して絶対必要なものではありません。しかし、今後サービス業にも大きな受注件名の応札に関してはこの認証取得が「十分評価される時がくると思います」と決断された社長さんの品質意識と良いサービスを提供しようとする基本方針が理解され、社会的に評価される時がくると信じたのです。

件名商売では工事や事業を受注するにあたり、発注者から、工事の要求内容を聴取し、自社の事業内容と体制を説明し、見積もりを作成する手順となります。会社概要を説明し、見積価格を提示し、工事完了の納期を提示して交渉を進めながら、受注の確定に進めるのが普通です。発注先の営業の方と良い信頼関係にあれば金額を提示した後注文の確定（随意契約）となりますが工事後の品質について不安材料が増えてくると入札が条件となる案件も増えてくるとも考えられる。

サービス事業における品質の低下で問題が生ずることがあれば、この種の品質保証が必ず話題になる。公的機関の発注においては、受注会社の資格だけでなく、公平公正に発注先を決定する建前上、入札が多くなることも考えられる。サービス事業では、IS09001 認証取得がサービスの完成度の質のひとつの強力な武器となります。認証取得の後には、会社の事業概要説明書だけでなく全社員の名刺への印刷表示などさりげなく、社長さんの会社の品質力をアピールできるようになります。将来競争相手が出てきた場合には、この認証が決め手となることも出てくる。

事業では、基本的な仕事の進め方を定め、それを実践することで会社全体の質が向上します。会社の業務の質を高めるには、このような地味な活動が重要です。手続きを始めないことには、ゴールに届きません。

スタートすれば少々時間を要しても、要求に満足する対策をひとつずつ解決して、ゴールに向かうことができる。新型コロナによる事業活動の自粛要請という消極的なムードを活用して、IS09000 認証取得という大きな結果に結びつけた好例である。

8 リモートワークの実態

新型コロナで通勤せずに自宅で仕事をするリモートワークに切り替えた会社が相当ある。急遽導入することになったため十分な準備が行えなかった企業も少なくない。特に会社のオフィスで使っていたパソコンをそのまま自宅に持ち込むことで暫定的なテレワーク環境を作ったケースも多い筈である。

会社のパソコンをそのまま持ち出して自宅で使うことには、日常社内で使用しているパソコンには社内の機密情報が保存されており、これが社外のネットワークに接続されることで情報漏えいにつながるリスク、自宅から直接無線の Wi-Fi ルーターで行う場合のリスク、日常直接部下の働きぶり見て管理することできないために発生するリスクなどが考えられる。

これらのリスクは、いわゆる表向きのリスクである。しかし、自宅でリモートワークをすることになると笑えないことも起こるのだ。

(1) 狭い我が家で親子が争奪戦

リモートワークで会社員が家庭で仕事をする機会が増加した。子供も

早く学校から帰り、自宅にいる時間も多し。パパの部屋が取れるくらい間取りがあれば問題はないが仕事をするパパの部屋で子供たちが勉強したり、遊んだりすることが多くなる。パパは、仕事に集中できないと文句がでる。子供たちは自由にやれることもパパがいるので制限される。特に天候の悪い日は、公園などで屋外に出かけて遊ぶこともできなくなり、子供たちの我慢の限界を超える。

リモートワークでパパと子供たちのスペースの争奪戦だ。お母さんは、子供たちの日常を知っており、パパの仕事も重要だ。パパと子供たちの部屋の争奪戦でお母さんは頭を悩ませる毎日になっている。

(2) 見られてしまったパパの姿

リモートワークでは、家庭から直接取引先への電話も当然多くなる。上司からの電話もかかることもある。営業担当は納期遅れなどでお客様へお詫びの電話をいれなければならなくなる。このような場合大切なお客様との電話口で丁寧な言葉遣いをする。時には、電話をしながら詫びを言うためにぺこぺこ頭を下げながらの対応もある。

日常子供たちは、仕事におけるパパの姿を見ることはほとんどない。電話口で丁寧な口調で頭を下げながらお詫びをする姿を見ることになる。リモートワークでは、子供たちにいつもと異なるパパの姿を見られてしまうことになる。

子供たちは、これが会社で仕事をする本当のパパかと思知らされることになる。「うちのパパはあまり偉くないんだ。会社ではぺいぺいなんだね」と父親には直接言えずに母親につぶやいたという。

この時の電話は、たまたまお詫びを入れただけかもしれない。子供たちにとって、パパは尊敬する存在である。いつも大変な苦勞をしながらも立派な仕事をしているものと信じている。しかし、この姿を見た子供にとっては、パパの日常の姿を知られてしまう。子供たちは、結構厳しい目で親の行動を観察している。子供の見る目は大変厳しい。子供たちを裏切る悲しい結果になってしまうことになったようだ。

8 編集担当へ届いた資料から

編集担当に届いた資料を読んで「身を守るためにどうすればよいか」「コロナに罹りにくい体質にする方法」「感染するとどうなるか」「拡散しない方法」はぜひ知っておきたいこととして整理してみた。

資料には、実際に感染して回復された方々の経験談が非常に少ないことである。新型コロナの感染があった経験者にアプローチができない。コロナに関する情報は、個人情報として秘密を守るために公にならない。一部のマスコミにより、長期間の意識不明で目を覚ましたら2週間経過していたなどと信じられないことが報道される。

コロナ感染者の厳しい体験談がもっと多く発表されれば、年齢に関係なく、新型コロナの感染の恐ろしさが理解されると思われる。現在の若者には両親が必ずいるはずで、彼らの両親のことを考えれば、自粛だからという軽はずみな行動ももっとも少なくなると思われるがどうだろうか。

まだまだ厳しい状況が続くような新型コロナへの対策として参考にしていきたい。

(1) コロナから身を守るために

感染には、飛沫感染と接触感染がある。基本的には、3つの密（密接、密閉、密集）を避けることである。飛沫感染は2メートル離れると感染しないとされているのでソーシャルディスタンスとして人との距離を2メートル以上あけること。モノに付着するコロナウイルスは、太陽光を2分浴びると半減すると言われている。積極的に太陽光を浴びることは効果がある。接触感染は、手洗いが感染予防の基本である。

- ①外出時には、マスクを常に着用すること。マスクもただ使用すればよいというわけではない。フェイスシールドは、開放している方向にどうしても飛沫は飛んで拡散する。「ないよりもまし」な程度と言われます。
- ②外食することは、飛沫感染、接触感染両方の危険性があるのでできるだけ避けることである。食事をする際に食べモノを口に入れると

きだけにマスクを外すと言っても、口の周辺に飛沫が飛ばないという保証はない。

人前で食事をしないことである。やむを得ない場合でも対面で食事をしないこと。

- ③コロナウイルスは、目からも感染します。医療や看護関係者がコロナ患者と接触する際には、精度の高い、密閉度の高いマスクを使用する。
- ④太陽光に3分充てる。外出に使用した洋服を直射日光に当てる
- ⑤換気して、時間の経過とともにコロナは死ぬ。加湿器を使用する。
- ⑥動物との接触は衛生に注意
- ⑦手洗い消毒、アルコール消毒 石鹸も可。
手を洗うときに石鹸やアルコールを使用することは更に効果が発揮される。

(2) コロナに罹りにくい体質

コロナに罹りにくくするには、我々自身の免疫力を高めることである。届いた資料から関連項目をまとめてみた。

- ①規則正しい生活
休養をとること。激しい運動は避け、睡眠をよくとるというアドバイスがある。
- ②ストレスを避ける生活
ストレスとは、身体や精神に負荷がかかることであり、喫煙、夜更かし、運動不足などがあげられる。これらはすべて人の免疫力を下げると考えておきたい。

お酒はいまや百薬の長ではなくなつたと言われるようになったと理解したい。

化学物質の過剰摂取、加工品更に医薬品もストレスと言えることはたくさんあると考えておきたい

③腸を鍛える

腸内細菌の活性化との記載がある。素人には腸を鍛えると言われても分かりにくい。その意味するところは、バランスのとれた食事や発酵食品をとることのようだ。

(3) 感染するとどうなるか

コロナの症状は、年齢だけでなく、感染してからの期間など条件によって大きく異なると言われる。少なくとも、下記の症状が確認されたら、コロナに感染したと考えて対応することが必要である。感染した回復した経験者の言葉を整理してみた。

- ① 最初は軽い咳 咳の出ないこともある。比較的軽い風邪の症状と同じ
- ② 寒気、悪寒、頭痛、筋肉痛
- ③ 味覚・嗅覚の異常
- ④ 下痢や嘔吐
- ⑤ 倦怠感 体がだるくなる
- ⑥ 息苦しくなる 呼吸困難
- ⑦ 高熱が出る 体温 38℃以上
- ⑧ 意識障害

意識障害が出たときには、自分での対応は難しいことを知っておくべきだろう。

(4) コロナを拡散しない方法

我々が身体を守るには、感染しないことが基本であるが、新型コロナを拡散しないことである。分かりやすい自己診断法、診断項目は次の項目である。

下記の自覚症状がでたら、生徒・学生は学校を休み休養する。社会人は、会社を休み様子を見る。子供の親は、子供にこのような症状が出ていることを確認したら学校を休ませる。

コロナは、感染して初期の場合、無症状でもコロナ菌の拡散力が強いといわれている。

- ① 発熱 37.5 度以上
- ② 咳が続く
- ③ のどに違和感がある
- ④ 味覚・嗅覚が無くなる
いつもの味と違うと言われた
口の中が苦く感じる
味が濃くなったと言われた

参考資料

- ・ 鷺沼診療所広報誌「春夏秋冬」
2020. 夏 緊急特集①、2020. 秋緊急特集②
- ・ みんなの健康 一般社団法人横浜市医師会発行 No. 279 11・12月号
最新医療情報 新型コロナウイルス禍における影響